

法 政 大 学 大 学 院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 日本文学専攻 修士課程《社会人》	2026年度 秋 季
専門科目		

【Ⅰ】

学力検査にあたらな問題のため、解答又は解答例、出題の意図はありません。

【Ⅱ】

《解答又は解答例》

ア 防人の歌

広義には、防人の役において、防人やその家族たちの作った歌。狭義には、防人たちの作った歌。広義での作は、「万葉集」 巻一四および巻二〇に、長歌一、短歌九七首が収録されている。家族との離別の悲しみや生活の苦しさなどを詠じた歌が多い。拙劣な点も見られるが、民衆の生活感情がうかがわれ、上代東国方言の資料としても貴重である。

イ 稗田阿礼

天武天皇の舎人。天皇の命で帝皇の日継と先代の旧辞を誦習。和銅四年（七一）元明天皇の命により太安万侶が阿礼の誦するところを撰録し、「古事記」三巻が編まれた。生没年不詳。

ウ 『拾遺和歌集』

平安中期の三番目の勅撰集。二〇巻。撰者、成立ともに未詳。花山法皇を中心に寛弘初年（一〇〇五～〇七）頃成立したとみられる。藤原公任の私撰集「拾遺和歌抄」との関連が深い。四季、賀、別、物名、雑、神楽歌、恋、雑四季、雑賀、雑恋、哀傷に部立され、一三五一首の歌を収める。万葉歌や紀貫之、大中臣能宣、清原元輔の歌などが多い。三代集の一つ。

エ 『浜松中納言物語』

平安末期の物語。現存五巻で首巻を欠く。菅原孝標の女の作とされる。康平五年（一〇六二）頃の成立。主人公浜松中納言と継父左大将の娘大姫との悲恋、また、実父の転生である唐土の第三皇子を訪ねて渡唐した際ちぎった河陽県の後との恋、帰国後その後の実母吉野の尼君を訪ねて知った吉野の姫君との悲恋など、物語は夢のお告げと仏教の輪廻転生を軸に展開し、舞台を中国にまで広げるなど浪漫的色彩が濃い。

オ 『とはずがたり』

鎌倉後期の日記。五巻。後深草院二条作。徳治元年（一三〇六）以後に成立。一四歳で後深草上皇の寵を得て、宮廷生活を送ったときの愛欲の記録や、三一歳で出家後、諸国を巡った旅の見聞・感想を記したもの。

法 政 大 学 大 学 院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 日本文学専攻 修士課程《社会人》	2026年度 秋 季
専門科目		

カ 狂言

南北朝時代に発生した中世的庶民喜劇で、能、歌舞伎、文楽（人形浄瑠璃）などとともに日本の代表的な古典芸能の一つ。特に能とは深い関係をもつところから〈能狂言〉とも呼ばれる。能が主に古典的題材をとり上げ幽玄美を第一とする歌舞劇であるのに対し、狂言は日常的なできごとを笑いを通して表現するせりふ劇という対照をみせている。

キ 八文字屋本

江戸時代、京都麩屋町の版元、八文字屋から出版された本。特に、元禄（一六八八～一七〇四）の末から明和年間（一七六四～七二）に出された役者評判記や浮世草子をいう。文学史的には浮世草子を意味し、なお拡大して同時代に他の本屋から出版された八文字屋風の浮世草子をもさす。時代物、気質物などに分かれ、通俗的娯楽読物として名声を得た。

ク 地本

江戸で出版された本。主として中本、小本の戯作や草双紙類をいう。上方下りの絵本に対していう。

ケ 『幻住庵記』

江戸前期の俳文。松尾芭蕉作。元禄三年（一六九〇）頃成立。作者が同年四月から八月中旬にかけて、幻住庵に住んだときの生活や感想を記したもの。

コ 平面描写

作者の主観を加えず、対象物や事件の経過の表面だけをありのままに描く小説の手法。明治末期に田山花袋が唱えた。

サ 石川淳

明治三二～昭和六二年（一八九九～一九八七）。小説家。東京出身。東京外語大卒。「普賢」で第四回芥川賞を受賞し作家的地位を確立。やがて方法意識を強く持った特異な作品世界を築く。また、和漢籍、仏文学などの幅広い文学素養をもとに、警拔なエッセイを多く残した。作品に「白描」「狂風記」「夷斎筆談」など。

シ 雑誌『新青年』

探偵小説・推理小説雑誌。月刊。大正九年（一九二〇）博文館から創刊。昭和二五年（一九五〇）廃刊。江戸川乱歩・横溝正史・小栗虫太郎・久生十蘭ら、日本の探偵小説・推理小説の代表的作家を生んだ。

ス フェルナン・ド・ソシュール

法 政 大 学 大 学 院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 日本文学専攻 修士課程《社会人》	2026年度 秋 季
専門科目		

一八五七～一九一三。スイスの言語学者。印欧祖語の母音組織を究明、また、歴史主義的言語学に対して、一般言語学の方法を提唱。記号学としての言語学の確立をめざした。著「一般言語学講義」は弟子たちが講義ノートを編纂したもの。

セ 形容動詞

日本語文法における品詞の一種。用言に属し、また形容詞と同様に物の性質や状態を表す。言い切りの形が、口語では「だ」、文語では「なり」「たり」で終わるもの。

《出題の意図》

日本文学史および日本語学の基本的な知識を問う。

【Ⅲ】

《解答又は解答例》

- 〔A〕 問一 そなたが尋ねなさるくらいのことは、どんなことでもお答え申し上げよう
問二 (1) 深き道 (2) 学問的・専門的なこと
問三 難しいことではなく日常のとりとめもないことについての問答という状況は誰にとってもわかりやすいうえどんなことが扱われるのか興味深いと思われたから。
問四 供御、つまりご馳走をふるまうこと。
問五 自信満々に何でも答えてやろうという資季大納言を、具氏が人口に膾炙したなぞことばの意味という答えようもない質問によってやりこめたこと。

〔B〕 学力検査にあたらな問題のため、解答又は解答例はありません。

《出題の意図》

〔A〕 基本的な古文の読解力を問う。

〔B〕 学力検査にあたらな問題のため、出題の意図はありません。